研究課題	2.2 地域に密着した詳細な気候変動予測情報提供に関する研究
研究期間	平成 25 年度～平成 26 年度（2 年計画第 2 年度）
実施官署	札幌管区気象台、東京管区気象台
担当者	[環境・応用気象研究部] ○佐々木秀孝、村田昭彦、川瀬宏明
目的	地球温暖化予測情報第 8 巻が平成 24 年度末に発行され、時期を同じくして各管区気象台には GPV データが配布される。地方官署においてはこれを良く理解して、ユーザに対して正しく解説していく必要が生じると思われる。地域毎に存在する気候現象は、農業・建築・交通・医療等様々な分野に重大な影響を与えるものと考えられるため、これらの現象の将来予測は速やかに行われる必要がある。 地球温暖化予測情報第 8 巻に用いられた温暖化予測の数値計算結果を基に、地域特有の気候現象がどのように表現されているのか調査する。また、それが地球温暖化により将来的にどのように変動するのかを予測し、それが起こる可能性についても吟味する。これらの成果は「地方版気候変動レポート」執筆に反映される。
目標	<ul style="list-style-type: none"> 地球温暖化予測情報第 8 巻のデータについて、その特質を良く理解し、地方における地球環境業務に役立てる。 日本各地における気候現象について理解を深め、それらの現象の将来変動予測をおこなう。 上記各項目の研究を進め、管区ごとに取りまとめる「地方版気候変動レポート」に反映させる。
研究の概要	<ul style="list-style-type: none"> 温暖化予測の数値計算結果をもとに各管区における地域平均の気候現象の再現精度を検証する。また、将来変動を評価する。 各管区に特有の気候現象を温暖化予測の数値計算結果の現在気候データから抽出する。 上記気候現象が現在気候再現実験データの中でどの程度の精度で再現されているのか検証する。 同様に将来予測データの中から同現象を抽出する。 現象の頻度・強度等を現在気候と将来気候の比較を行い、バイアス補正、有意性の検証を伴って将来における同現象の変動予測を行う。
平成 26 年度実施計画	<p>【札幌管区気象台】 冬型の気圧配置による日本海側の降雪やオホーツク海側における春先のフェーン現象、胆振地方オロフレ山系の収束性豪雨など、北海道の地域特有の現象に着目して研究を実施する。</p> <p>【東京管区気象台】 温暖化予測の数値計算結果で再現されている管内独自の気候現象の有無を調査し、その成果を用いて将来の気候変動を解析する。</p>
波及効果	<ul style="list-style-type: none"> 地球温暖化予測情報第 8 巻についての理解が深まり、地方担当者の解説能力の向上が見込まれる。 きめ細かな気候変動予測が出されることにより、気候変動による地域ごとに生じる災害に対する軽減策を講じることが可能になる。 管区ごとに作成している「地方版気候変動レポート」等に成果が反映される。 物理量や統計量での定義が不明瞭な気候現象の理解と整理が進む。 身近な気候現象に関する将来の予測資料が出されることで、地球温暖化に関する正しい知識の普及啓発に役立つばかりでなく、自治体等が進める適応策の策定と実施に資することが可能になる。